平成 27 年度地域志向教育経費

採択事業成果報告集

高知大学
地域志向教育経費選考委員会

平成 28 年 3 月

平成27年度地域志向教育経費　採択事業一覧

番号	開講部局名	新設・転換	授業科目名	担当教員	学期	ページ
1	共通教育	転換	課題探求実践セミナー(自由探求学習I) 課題探求実践セミナー(自由探求学習II)	俣野 秀典 他	第1学期/ 第2学期	1,2
2	共通教育	転換	課題探求実践セミナー(学びを創る)	俣野 秀典、杉田 郁代、 斉藤 雅洋	第1学期	3
3	共通教育	新設	課題探求実践セミナー(人文学部)	横川 和博、西島 文香、 海野 晋悟	第2学期集中	4,5
4	共通教育	新設	課題探求実践セミナー(人文学部)	中道 一心、赤間 聡、 新井 泰弘	第1学期集中	6,7
5	共通教育	新設	生物多様性から考える食と農の未来	原崎 道彦	第2学期	8
6	共通教育	新設	社会起業論	須藤 順	第1学期	9
7	共通教育	新設	食と農の経済学	霜浦 森平	第2学期	10
8	共通教育	新設	川と人の生活誌	森 明香	第2学期	11
9	共通教育	新設	法化学概論	西脇 芳典	第2学期	12
10	共通教育	新設	社会調査論	湊 邦生	第1学期	13
11	共通教育	新設	統計解析の基礎	湊 邦生	第2学期	14
12	共通教育	新設	質的調査法	俣野 秀典	第2学期	15
13	共通教育	新設	ファシリテーション演習	俣野 秀典	第2学期集中	16
14	教育学部	新設	乳児保育	川俣 美砂子	第2学期	17
15	教育学部	新設	技術科指導法Ⅰ	増尾 慶裕	第1学期	18
16	農学部	転換	施設園芸テクノロジー論	宮内 樹代史、 島崎 一彦	第2学期	19
17	地域協働学部	新設	地域協働論	上田 健作　他17名	第1学期	20
18	地域協働学部	新設	地域社会学概論	玉里 恵美子	第1学期	21
19	地域協働学部	新設	地域組織論	内田 純一	第2学期	22
20	土佐さきがけ プログラム	転換	Japanese Studies Taught in English Ⅱ: Japanese Culture	前西 繁成	第1学期集中	23
21	土佐さきがけ プログラム	転換	産官学連携インターンシップ 生命と環境Ⅰ	永田 信治　他	第1学期集中	24,25

1

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部 大学教育創造センター	担当教員名	俣野秀典、塩崎俊彦、辻田宏、今城逸雄
授業科目名		課題探求実践セミナー（自由探求学習Ⅰ）		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

【履修状況】

人文学部、理学部の２学部の学生 36 名が受講した。殆どが１年生であり、高知県外からの進学者が多数を占めていた。

【授業での地域に関する取組具体内容】

グループを５人～６人で構成して、５段階にわたって最終段階のプレゼンテーションの準備を行った。第１段階はテーマ設定、第２段階は企画書の提出、第３段階はチームで中間発表の原稿を作成し発表、第４段階は、中間発表Ⅱ、第５段階は最終プレゼンテーションを授業担当以外の審査員の前で行った。

地域に関する取組は、プレゼンテーションにおいて「高知」という地域に関わる素材を扱い、それについてインタビューや実地、文献等調査を行い、プレゼン用資料を作成していった。「伝える」工夫として、どう伝えるかについても意識して教員側はチュートリアルを行った。

◎「高知の珍食材を使ってアイデア料理をつくる」

高知県では当たり前に流通しているが、他県にはない食材について調査を行った。その過程において、日曜市と良心市への実地調査、高知県出身学生にインタビュー調査、高知県外出身者に食材認知度についてアンケート調査と聞き取り調査を実施した。その後、高知県の珍食材を 17 品挙げて、その調理を実際に行い、試食会を行った。最終段階として、学内の生協の学食において、高知県の食材である「リュウキュウ」「沖ウルメ」「メヒカリ」を用いた炊き込みごはんを提案した。

◎「（高知の日差しの強さを利用して）日光で料理をする」

高知県の日照時間の長さに着目して、その日差しを利用して、料理をする検証を行った。高知県は将来的に大きな地震が想定されていることから、日光は災害時に役に立つ道具になるのではないかと考えたことをきっかけに始まった。鏡川やキャンパス内で実際に料理を行った。

【成果等】

１．「高知」という地域を理解するための調査方法の獲得

高知県外出身の学生と県内出身の学生が、「高知」という地域について、実地調査のために現地に足を運んだり、インタビュー調査や定量調査によって、認知度を測定したりする中で、複数の調査方法について獲得できたと考える。また、受講者のコメントを見ると「高知」という地域への新たな気づきが生まれたと書かれており、地域理解が進んだと考える。

２．「高知」という地域を、プレゼンで知らない人にどう伝えるかの手法の獲得

特に、調査した「高知」ことを、チーム以外の学生にどう伝えるかについては、映像や写真、具体物を使うなど、伝えるだけでなく、チーム内の学生が感じたことを共有してもらうための工夫を学んだと考える。

1

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部、大学教育創造センター、男女共同参画推進室	担当教員名	俣野秀典、塩崎俊彦、竹岡篤永、廣瀬淳一、杉田郁代
授業科目名		課題探求実践セミナー（自由探求学習Ⅱ）		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

【履修状況】

人文学部と農学部、理学部の３学部の学生 21 名が受講した。殆どが１年生であり、高知県内出身者２割と高知県外出身者８割で構成。

【授業での地域に関する取組具体内容】

グループを５人～６人で構成して、５段階にわたって最終段階のプレゼンテーションの準備を行った。第１段階はテーマ設定、第２段階は企画書の提出、第３段階はチームで中間発表の原稿を作成し発表、第４段階は、中間発表Ⅱ、第５段階は最終プレゼンテーションを授業担当以外の審査員の前で行った。

地域に関する取組は、プレゼンテーションにおいて「高知」という地域に関わる素材を扱い、それについてインタビューや実地、文献等調査を行い、プレゼン用資料を作成していった。「伝える」工夫として、どう伝えるかについても意識して教員側はチュートリアルを行った。

◎「半日チャリコギ隊　高知の秘境探し」

高知大学の学生の殆どが持っていると考えられる自転車を使って、半日程度で行くことが可能な高知県の秘境について、その魅力についてプレゼンテーションを行った。県外出身者が殆どであったことから、半日程度で行くことができそうなエリアを選定するために高知県の地図とガイドを参考に情報収集し、３秘境を選定した。秘境地は、龍河洞（高知県東部）と須崎（高知県西部）、土佐山（高知県北部）であった。最終的にガイドブック的なものを想定していたことから、３秘境実地調査と周辺の観光名所等の事前の情報収集を活動として行った。実地調査では自転車で行くことを基本的な考えとするために、走行ルートと走行中の休憩場所自転車修理の箇所などについても事前情報収集を基に現地に赴いた。実地調査では他の学生たちにその秘境の魅力についてアピールするために、写真の記録や周辺地の観光スポット、店舗等の記録を丁寧に行った。最終プレゼンテーションでは、実地調査を行った秘境についてプレゼンテーションを行った。高知県の自然の魅力と現地に行かなければわからないような地元ネタを、どう伝えていくかについて検討を重ねた。

【成果等】

１．「高知」という地域を、プレゼンで知らない発信するための手法の獲得

特に、調査した「高知」ことを、チーム以外の学生にどう伝えるかについては、映像や写真、具体物を使うなど、伝えるだけでなく、チーム内の学生が感じたことを共有してもらうための工夫を学んだと考える。

２．「高知の良さ」を伝えるためのインターネット上の情報だけに頼らずに、現地調査を行い実際に情報を確かめて、自分達で新しい情報を探してみる等の情報収集力と行動力の獲得

2

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部 大学教育創造センター	担当教員名	俣野秀典、杉田郁代、 斉藤雅洋
授業科目名		課題探求実践セミナー（学びを創る）		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

学習プログラムを学生自らが創っていくところに本授業の特徴がある。学生は、序盤で既存のプログラムを体験することを繰り返し、中盤ではカードを使った簡易なプログラム創りに取り組み（フィードバックを受けての改善を含む）、終盤では自由裁量による全く新しいプログラムを創作・実施する。

地域に関する授業実施については、地域を題材としたプログラム作成（第5・11回）、地域（高知に住んでいる自分たちー地域ー地球の繋がりも含む）を題材としたワークショップ（第2・9回）に取り組んだ。

学生が取り組んだ地域課題は以下のとおりである。

・地元に帰ったときに高知について自慢できるようになる。
・高知の魅力や特徴を幅広く知って、さらに意外な発見もする。
・高知の特産品や観光名所を知る。
・高知の環境問題についての専門知識を得る。
・大学周辺（朝倉）のことについてもっともっと知る。

ワークショップでは、発展途上国におけるコットン（綿花）産業の児童労働の問題を、私たちの地域生活の問題として捉え返すことを主題に、クイズやロールプレイなどのアクティビティを行い、補助教材として映像資料を活用した。

高知を題材にした学習プログラムについて、Creator と Player 双方を行き来する経験を提供した。物事を理解するには他者に紹介したり教えたりするとよいと言われており、Creator（プログラムの作成・提供者）としては、まさに高知について自ら学ぶ機会となったといえる。また自分の興味と少しずれたところにあるプログラムを Player（プログラム体験者）として関わることで、興味が拡張される機会となった。つまり、Creator と Player それぞれを体験することを通して、自分の興味のある「高知の〇〇」については狭く深く知ることができ、それまであまり興味のなかった「高知の△△」については広く浅く知ることとなった。

中盤で実施されたワークショップでは、多くの学生が児童労働の過酷な現状を引き起こしている原因のひとつが自分たち自身の消費行動にあることに気づいた。海の向こうで起こっていることと、日本・高知・朝倉に生きる彼らの日常とのリンクを理解することで、さらに地域を見直す機会となり、後半の学習プログラム作成につながった。

課題探求実践セミナーであり、高大連携授業である本授業は、大学生 30 名＋高校生 7 名で実施された。人文学部・理学部・農学部・TSP の 1 年生が受講し、うち 27 名が単位修得している。

3

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	吉尾寛
	担当教員所属学部等	人文学部	担当教員名	横川和博、西島文香、海野晋悟
授業科目名		課題探究実践セミナー（人文学部）		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

【履修状況】
履修登録者 34 名、単位修得者 32 名だった。

【授業内容】
1 月 29 日（金）５時間目
□オリエンテーション
□グループ分け（１１班）
□課題（模造紙に新聞記事をまとめる：新聞ができるまで／大王製紙と高知新聞の紹介）

2 月 29 日（月）２～５時間目
１．課題のプレゼンテーション（各班５分）
□各班の新聞に対するコメント（ポストイット：Ｇｏｏｄ／Ｂａｄ）
□教室に模造紙を貼ってコメントのポストイットを貼る
□コメントの集約

２．質問事項の列挙（参照：CSR 報告書、川之江工場パンフ）
□黒板に質問事項を班ごとに書き、説明する
□本講義の概要を復習

３．インタビューの作法（参照：阿川佐和子の「課外授業教えて先輩！」）
□ノートを取ること：取れるノートと筆記用具を探すこと
□うなずく→オウム返し→言い換える→引っ張ってくる
□マトリクスを意識して質問する
□「具体的／抽象的」×「本質的／非本質的」マトリクス
□「聞きたいこと／聞きたくないこと」×「話したいこと／話したくないこと」
□質問の答えから質問をつくる
□聞き手に徹する
□具体的には？との問い

４．工場見学の注意事項
□集合時間
□持ち物：筆記用具、ノート、飲料、タオル
□服装：サンダル、ミュール、ハイヒールふわふわスカート厳禁

５．新聞を読む（要る記事／要らない記事）
□新聞の読み方（高知新聞高本記者）
□課題（今日やったことを新聞記事にする）

3 月１日（火）１～４時間目
１．紙を分類する（各自３名ずつ）
□２軸で４つのマトリクス

２．大王製紙・四国紙販売への質問事項の整理

３．大王製紙・四国紙販売の見学及び質疑応答
□大王製紙で概要説明→大王製紙／四国紙販売の見学および全体質疑応答
□課題（今日やったことを新聞記事にする）

３月２日（水）１～５時間目
１．高知新聞社への質問事項の整理

２．高知新聞社の見学及び質疑応答
□高知新聞社本社での見学、質疑応答
・まほろばセンターでの見学、質疑応答
・高本記者による「記事作り」のポイント
□課題（今日やったことを新聞記事にする）

３月３日（木）２～５時間目
１．新聞記事の作成
□新聞記事の発表／高本さんからの講評

２．新聞の価値を探る
□学生が求める新聞の価値、それを実現する紙面とは？

【地域に関する授業】
地方新聞である高知新聞社の全面的な協力のもと、「新聞紙が『何』から作られているかを探る」ことをテーマに授業を展開した。高知新聞社では編集局地域報道部を新たに設ける組織改編を行い、そこで活躍する記者自身が地域課題に焦点を当てて取材活動を行っている。これらの記者による業務内容の説明および質疑応答を通じて、学生は地域課題を理解することになった。また、記者→編集局→工場→販売所→自宅まで届けられる仕組みを目の当たりにすることによって、今後、地方紙が直面するであろう経営課題を発見する機会になっている。

【成果】
授業内容・課題を通じて、多くの受講生が「新聞が社会に存在する意味を理解できる」「モノが生産、消費、廃棄されるプロセスを理解できる」「自分が考えていることについて、他者が読むことを意識しながら書くことができる」といったシラバスに示した到達目標を達成できるようになった。模造紙での新聞紙づくりや、毎回のレポート課題として「記事」づくりを課したが、これらが他者を意識した文章執筆に大きく寄与していると思われる。この点について、第１学期に開講した同講義にも増して学生が成長する姿をみることができた。

4

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	吉尾寛
	担当教員所属学部等	人文学部	担当教員名	中道一心、赤間聡、新井泰弘
授業科目名		課題探究実践セミナー（人文学部）		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

【履修状況】
履修登録者 55 名、単位修得者 53 名だった。

【授業内容】
7 月 24 日（金）５時間目
□オリエンテーション
□グループ分け（１１班）
□課題（模造紙に新聞記事をまとめる：新聞ができるまで／大王製紙と高知新聞の紹介）

8 月 17 日（月）２～５時間目
１．課題のプレゼンテーション（各班５分）
□各班の新聞に対するコメント（ポストイット：Ｇｏｏｄ／Ｂａｄ）
□教室に模造紙を貼ってコメントのポストイットを貼る
□コメントの集約

２．質問事項の列挙（参照：CSR 報告書、川之江工場パンフ）
□黒板に質問事項を班ごとに書き、説明する
□本講義の概要を復習

３．インタビューの作法（参照：阿川佐和子の「課外授業教えて先輩！」）
□ノートを取ること：取れるノートと筆記用具を探すこと
□うなずく→オウム返し→言い換える→引っ張ってくる
□マトリクスを意識して質問する
□「具体的／抽象的」×「本質的／非本質的」マトリクス
□「聞きたいこと／聞きたくないこと」×「話したいこと／話したくないこと」
□質問の答えから質問をつくる
□聞き手に徹する
□具体的には？との問い

４．工場見学の注意事項
□集合時間
□持ち物：筆記用具、ノート、飲料、タオル
□服装：サンダル、ミュール、ハイヒールふわふわスカート厳禁

５．新聞を読む（要る記事／要らない記事）
□新聞の読み方（高知新聞高本記者）
□課題（今日やったことを新聞記事にする）

8 月 18 日（火）１～４時間目
１．紙を分類する（各自３名ずつ）
□２軸で４つのマトリクス

２．大王製紙・四国紙販売への質問事項の整理

３．大王製紙・四国紙販売の見学及び質疑応答
□大王製紙で概要説明→大王製紙／四国紙販売の見学および全体質疑応答
□課題（今日やったことを新聞記事にする）

<u>８月 19 日（水）１～４時間目</u>
１．高知新聞社への質問事項の整理

２．高知新聞社の見学及び質疑応答
□高知新聞社本社での見学、質疑応答
・まほろばセンターでの見学、質疑応答
・高本記者による「記事作り」のポイント
□課題（今日やったことを新聞記事にする）

<u>８月 20 日（木）２～５時間目</u>
１．新聞記事の作成
□新聞記事の発表／高本さんからの講評

２．新聞の価値を探る
□学生が求める新聞の価値、それを実現する紙面とは？

【地域に関する授業】
　地方新聞である高知新聞社の全面的な協力のもと、「新聞紙が『何』から作られているかを探る」ことをテーマに授業を展開した。高知新聞社では編集局地域報道部を新たに設ける組織改編を行い、そこで活躍する記者自身が地域課題に焦点を当てて取材活動を行っている。これらの記者による業務内容の説明および質疑応答を通じて、学生は地域課題を理解することになった。また、記者→編集局→工場→販売所→自宅まで届けられる仕組みを目の当たりにすることによって、今後、地方紙が直面するであろう経営課題を発見する機会になっている。

【成果】
　授業内容・課題を通じて、多くの受講生が「新聞が社会に存在する意味を理解できる」「モノが生産、消費、廃棄されるプロセスを理解できる」「自分が考えていることについて、他者が読むことを意識しながら書くことができる」といったシラバスに示した到達目標を達成できるようになった。模造紙での新聞紙づくりや、毎回のレポート課題として「記事」づくりを課したが、これらが他者を意識した文章執筆に大きく寄与していると思われる。

5

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	教育学部	担当教員名	原崎道彦
授業科目名		生物多様性から考える食と農の未来		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

１６名の学生が履修登録をおこない、うち１４名が実際に授業を履修した。
授業は５回のレクチャーからスタートした。
原崎による２回のレクチャーは、今日のグローバルなフードシステムと環境問題、格差・貧困問題との関係を解説しながら、それらの問題を解決する試みのひとつとして（生物多様性にもとづく）有機農業があることを指摘した。
谷川徹氏による３回のレクチャーでは、有機農業の歴史･思想的な背景を概観しながら、国連における取り組み、高知県における取り組みの現状が紹介された。
５回のレクチャーのあと、高知県梼原町にある谷川氏の圃場において１泊２日の合宿をおこなった。合宿における授業は、おもに、谷川氏の圃場における観察・実習と、宿泊施設におけるそのふりかえり・分析というかたちでおこなわれた。授業は学生にとって、有機農業がおこなわれている圃場に直に触れることができただけでなく、高知の中産間地域における農業の現状を実体験することができる時間となった。合宿中の食事は梼原の新鮮な食材をもちいて学生が自炊した。そのさいに地域のかたがお手伝いにきてくださり、学生にとって貴重な交流の場となった。
合宿後は、４回のグループワークのあと、授業成果のプレゼンテーションとなった。プレゼンテーションは４つのグループにわかれておこなった。プレゼンテーションは、有機農業と慣行農業とを対比させることをテーマとするものが２つ、有機農業のさまざまなかたちを対比させることをテーマとするものが２つであった。プレゼンテーションでは、レクチャーや梼原合宿での体験をベースに学生独自の情報収集や分析がおこなわれていたが、いずれも、高知における有機農業の現状や課題をふまえながら、その未来を展望するものとなっていた。

6

新設 ・ 転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	須藤順
授業科目名		社会起業論		

授 業 実 施 報 告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

履修状況；
28 名

授業での地域に関する取組具体内容；
本講義では、高知県内の社会起業家及び社会的企業に関する事例を取り上げた。具体的には、四万十ドラマ(四万十町、四万十町産のお茶を活用した商品開発や栗を活用したケーキ等を開発し全国で販売)、馬路村農協(馬路村、ゆずを使ったポン酢やジュース、お菓子等を開発し、全国へ販売)、黒潮実感センター(大月町、アオリイカの里親制度を構築し、資源保全を図りながら全国へイカを発送)、ど久礼もん(中土佐町、カツオを使ったラー油や味噌、カレー等を開発し、販売)等を取り上げ、その起業プロセス、ビジネスモデル、ステークホルダーマップについて教示した。
また、課題として、高知県内の社会起業家事例の調査を課し、提出された課題に対して個別にフィードバックを行うとともに、県内の類似事例についての情報提供を行った。なお、県内事例の情報提供は講義で直接取り上げたケース以外にも複数学生に提示し、県内の社会起業家及び社会的企業についての関心と理解を深められるよう配慮した。
さらに、矢野大地氏（本学卒業生）などをゲストとして呼び、社会起業家として活動する人材の生の声を学生に伝えた。
なお、講義を実施するにあたり、四万十ドラマ、馬路村農協、ど久礼もんについては現地訪問を行い、ヒアリング、意見交換を行った。黒潮実感センターについては代表者に高知市内においてヒアリング、意見交換を行った。
講義では学生に対し、県内の社会起業家が開発販売する商品等を実際に見せるなど、できるだけ具体的なイメージが想起しやすいよう配慮を行った。

成果等；
- 高知県が社会起業家、社会的企業の先進的地域であることに対して学生の関心を高めた。
- 地方における社会起業家は、地域社会との信頼関係の形成、地域内経済循環の創出を意図したビジネスモデルの構築、多様なステークホルダーとのネットワークの形成が重要である点について理解を図り、学生に興味関心と地域への関心を高められた。
- 学生たちにはマイプロジェクトシート(me 編：ライフヒストリーを中心としたシート、project 編：自分ごとで取り組むことのできるプロジェクトを書き出すシート)を使い、それぞれが自分の身近にある問題や関心からプロジェクトを描き、受講生同士で相互にフィードバックをし合い、一人一人が具体的アクションに取り組んだ。なお、中間・最終報告会を開催し、受講生が自分のマイプロジェクトを発表した。

7

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	霜浦森平
授業科目名		食と農の経済学		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

1. 履修状況

履修者数合計：133 名

うち学年別：
1 年 112 名、2 年 12 名、3 年 5 名、4 年 4 名

うち学部別：
人文学部 15 名、教育学部 4 名、理学部 28 名、医学部 23 名、
農学部 29 名、地域協働学部 32 名、土佐さきがけプログラム 2 名

2. 授業での地域に関する取り組みの講義内容

高知県内で取り組まれている農村ツーリズムによる地域活性化について講義し、地域の「食」の観光振興への活用方法について紹介した。特に、高知県における六次産業化、農村ツーリズムの取り組みを中心に講義を行なった。具体的には、農家レストラン（「くさぶき」（梼原町）、しゃえんじり（四万十市）、鷹取の家（梼原町））、体験民宿（「かみこや」（梼原町））について講義した。また、四万十川流域で行なわれている農村ツーリズムの展開状況についても講義を行なった。

3. 成果等

高知県における農村ツーリズムによる地域活性化の社会的･経済的役割･意義について、受講学生は知見を深めることができた。講義では振り返りレポートを作成・提出させているが、下記のようなコメントが学生から寄せられている。

・「六次産業化と聞くと、まるで自分には関係のないことだと思っていましたが、意外と身近なところに六次産業を体現している場所があり、驚きました。こういった部分にもっと目を向けていきたいと思います。」
・「農家民宿が増えることによって女性や高齢者の役割が大きくなることは良いことだと思いました。自分の想像よりも農家民宿の数は多く、規模の大小も様々であり、自分の地元でも農家民宿があると思うので、もっと知りたいと思いました。」
・「農村ツーリズムは女性の社会進出に強い役割を担っていると知り、新たな視点から見れるようになりました。また、お金をかけずともそうした活動はできる、とあり、非常に夢があると思いました。」

上記の学生の振り返りからも示される通り、講義を通して、新たな視点への着目や気づき、学習意欲の向上、県内の取り組みへの関心の高まりといった効果を発揮できたと考えられる。講義での振り返り小レポートについては、冊子としてまとめた。

8

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域連携推進センター	担当教員名	森明香
授業科目名		川と人の生活誌		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

履修者内訳

	1年	2年	3年	4年	計
教育学部	0	3	1	0	4
人文学部	7	0	0	0	7
農学部	9	0	1	1	11
理学部	6	5	0	3	14
医学部	8	0	0	0	8
地域協働学部	31	0	0	0	31
計（人）	61	8	2	4	75

本講義の履修者は75名、内65名が単位を修得した。下記では、講義と地域に関する取組みに関する概要に言及した上で、具体的な内容について説明し、成果に言及する。

本講義では川と人との関わりの歴史を主題とし、自然界における川の役割に触れた上で、「川の文化」、「川と流域の開発」、「川の再生を求める動き」の3部構成とし、仁淀川流域の川漁師への聞き取りに基づく川の民俗学および四万十川における家地川堰堤撤去を求める動きなどの河川再生の取組を1、3部で取り上げることを想定していた。しかし昨夏より県内河川の社会史調査を進める中で、高知市内を流れる江の口川や新堀川に関する聞き取りデータや史資料および教材として使いうる映像や新聞記事等の渉猟が進んだため、「川と流域の開発」において経済成長期の排水路としての川の具体例として江の口川、都市化に伴う川の暗渠化の具体例として新堀川をそれぞれ主に取り上げることに予定を変更し、鏡川・仁淀川・四万十川については堰や水運との係り、および全国的な川の再生を求める動きの一環を言及するにとどめることとした。シラバスから上記のとおり変更する旨を第1回講義時に受講生に伝えた上で、講義を実施した。

では、地域に関して具体的にどう取り上げたのか。まず「川の文化」では、江戸時代以降に全国的に発達した水運や灌がいのための水路開発の文脈を解説した際、身近な具体例として朝倉堰および鏡川流域の古地図（朝倉の郷土史家・弘田五郎氏提供）を講義中に示し、古来より代々川の傍で暮らしてきた人びとの営みが今なお見られることを示した。次に、地域との関連をとりわけ重視した「川と流域の開発」では、①高知パルプ事件から見る江の口川と②都市道路と水質汚染による暗渠化の具体例として新堀川を取り上げた。①は、高知パルプの製紙工場（現イオン旭町店）の廃液によって 1960 年代に健康被害を及ぼす水質汚濁および硫化水素による大気汚染が生じたが、工場が対策を怠ったために住民が実力行使へ及んだ刑事事件である。当時への想像力を養い、ステークホルダーの心境や行動規範を理解してもらうため、当時NHK で全国放映されたドキュメンタリー「廃液」を鑑賞し、本学 OB の「浦戸湾を守る会」事務局長による講話に耳を傾けた上で、グループワークを実施した。②は、経済成長期の都市化に伴う都市道路整備と川の汚染に「蓋をする」ために暗渠化が進んだが、他方で川が地域のコミュニティの場として成り立ってきた歴史があり、今後何を重視していくべきなのかを、明治時代から続く新堀川界隈の商家である西岡氏の講話を通じて議論した。さらに、「川の再生を求める動き」では、江の口川・新堀川と県外のダム問題を踏まえた上で、戦後日本社会が川との関わり方を変質させ破壊し続けてきた教訓として、多自然工法とダム撤去に触れ、四万十川支流家地川でも堰堤撤去を求める運動があったことを一例として紹介した。

本講義をきっかけに他の講義で浦戸湾や新堀川について調査発表を行ったと最終回のコメントペーパーに記す受講生がいた。受講生の多くにとってより身近な川の社会史を紹介したことで、川と人との関わりの歴史や県内や実家など身近な川への意識喚起をしえたことが、コメントペーパーや期末試験の論述からうかがえた。これらは本講義の成果であろう。

9

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	教育学部	担当教員名	西脇芳典
授業科目名		法化学概論		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

１．履修状況

１１名が履修し、１０名に単位を認定した。１０名は全１６回の授業の９０％以上を出席し、積極的な姿勢で授業に参加していた。

２．授業での地域に関する取組具体内容

本授業は大きく分けて３部で構成される。１部は、無機・有機の分析方法の理解である。法化学（科学捜査）で広く用いられるガスクロマトグラフィー・液体クロマトグラフィー、質量分析、赤外吸収分光法、顕微分光法、蛍光Ｘ線分析法について、例題を解きながら基礎を習得した。２部は、覚せい剤、大麻、麻薬などの乱用薬物の依存性・物性・特性・分析方法について理解した。３部は、自動車塗膜、単繊維、ガラスなどの工業製品の原料、特性、特徴、分析方法について取り扱った。法化学を語る上で不可欠な各種機器を用いた分析方法を学び、それを軸として乱用薬物、工業製品の特徴を理解できるように配慮した。

授業では高知県の実情に合わせ、覚せい剤と自動車塗膜の鑑定方法について特に詳細に解説した。統計から高知県は覚せい剤による薬物犯罪が多い。覚せい剤の依存性・危険性・裁判による量刑についても扱うとともに、覚せい剤による犯罪を立証するために行われている現場分析、前処理、分析方法について、尿試料・粉末試料、それぞれについて詳細に解説した。

また、高知県は公共交通の整備が十分でないので、自動車社会である。そのため、交通事故犯罪が多数発生している。交通事故の原因究明、犯罪者探索に有効な証拠試料が、自動車塗膜である。自動車塗膜の製造方法、原料、層構造に関する基礎を知った上で、顕微鏡検査・顕微分光・顕微赤外吸収分光を行うことで、自動車塗膜が高精度に識別でき、加えて車種特定できるプロセスを解説し、容易に理解できるよう工夫した。

授業では高知県で起こった事例を多数紹介し、授業内容とリンクさせることで地域の安全・安心のために法化学（科学捜査）がいかに役立っているか、大学で学んでいる基礎化学がいかに重要かを感じて貰えるよう配慮した。

３．成果

１６回目にテストを実施したところ、テストを受けた全員が８０点以上であり、高い理解度を示した。テスト時に本授業の感想を聞いたところ、「化学が実社会に役立っていることを知ることができ、有意義であった」、「社会の安全を支える法化学に興味を持ち、将来は法化学関係の職に就きたいと考えるようになった」、「薬物の危険性に関する知識を身につけることができた」など肯定的な意見が多かった。以上のことから、本授業内容は地域を理解する上で有用であると考えられる。次年度は本年度の反省点を踏まえ、より良い授業になるように努めたい。

10

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	湊邦生
授業科目名		社会調査論		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

1.　履修状況

本授業は第 1 学期に開講し、78 名の学生が受講登録を行った。最終的に 70 名が単位を修得した。

2.　授業での地域に関する取組具体内容

授業では、高知県・高知市が実施している世論調査や、県・市がインターネット上で公開している統計データについて解説したほか、政府の統計窓口 e-Stat を用いて高知県内の市町村を分析する方法、高知市内で文献収集を行うための図書館等の施設を紹介した。加えて、県内の話題として統一地方選挙の投票率低下や、学校基本調査の結果に基づく県下高校生の大学進学率を取り上げたほか、授業外の復習用課題や期末試験で、本学及び高知県にちなんだ内容の問題を出題した。

3.　成果等

本授業の受講生は地域協働学部の学生が圧倒的多数を占めていた。つまり、受講生のほぼ全員にとって、講義形式の授業自体は初めてであり、また受講生の中にはいわゆる「座学」への関心が高いとは言えない学生も少なからず見受けられた。そのような中で、毎回の授業開始から終了まで、受講生の注意力を持続させることには相当の困難が伴った。ただ、学生の多くが関心を持つ地域の話題を取り上げたり、地域について学ぶ方法について解説をしたりすることで、ある程度は受講生の注意力低下を食い止めることができたのではないかと考えている。15 週目アンケートを確認する限り、授業に対する否定的な評価が少数であり（「この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか」という設問への否定的な回答が回答全体の 11%）、また「授業内容が学問や社会の現代的課題に応えている」「授業内容が受講生の関心・興味に合っている」との回答が寄せられたこと（前者は回答者の 44%、後者は 33%）ことは、その傍証となろう。加えて、受講生の中には第 2 学期に行われた高知市内での実習授業に際して自ら調査を企画、実施する者も現れており、この授業は受講生が社会調査についての知識を習得、理解するとともに、地域での学びを深めることにもつながったと言い得る。

11

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	湊邦生
授業科目名		統計解析の基礎		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

1.　履修状況

本授業は第2学期に開講し、受講者数は59名であった。最終的に48名が単位を修得した。

2.　授業での地域に関する取組具体内容

授業に先立って、高知県内の20～40代の男女計30名を対象として調査を実施したとの想定で仮想データを構築した。このデータをKULAS経由で配布するとともに、データに基づく統計分析に関する授業内での練習問題や授業外課題を作成し、学生が学習する上での参考とした。

加えて、高知県が平成27年に実施した県民世論調査の結果も活用した。具体的には、3重クロス表分析（エラボレーション）に関して、同調査の報告書に記載された集計表を編集した上で問題を作成、授業外課題として出題した。さらに、期末試験でも同様にして集計表の編集とその結果に基づく出題を行った。

3.　成果等

上記の試みは、学生が統計データ分析を実際に行うことで、理解を深めることにつながるものであったと考えられる。また、本授業のように数学的ないし抽象的な内容が中心の授業では、ともすれば無味乾燥な数式計算のみに終始してしまい、分析手法の意義や実用すべき場面についての理解が伴わず、結果として授業への学生の関心を減退させる危険が存在する。地域のデータを活用することで、本授業はそのような危険を回避することができたものと考えられる。

とりわけ、受講生の半数以上が地域協働学部の学生であったことから、県内の調査の仮想例と実例双方を示すことは、学生の関心と学習意欲をつなぎとめる上で、一定の効果があったと判断される。このことは、15週目アンケートでの評価が好評であったこと（「この授業は、総合的に考えて、満足がいくものだと思いますか」という設問に否定的な回答がない）、また「授業内容が学問や社会の現代的課題に応えている」「授業内容が受講生の関心・興味に合っている」との回答が寄せられたこと（前者は回答者の32%、後者は48%）にも示されている。

12

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	俣野秀典
授業科目名		質的調査法		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

本授業は社会調査分野における「質的調査」の基礎知識の習得を目指すものであり、質的調査法（序盤）→質的データの分析法（中盤）→個人課題の設定・調査・分析（終盤）という流れで実施された。

授業では、高知県内で実施された聞き取り調査データおよび質的データを扱ったワークショップを紹介し（第 2・8 回）、学生個人はインタビューを実施した。観察とインタビューのかんたんな体験のあと、高齢者へのインタビューを実施した（第 13 回）。終盤の個人課題については、10 名が高知の産業や組織を対象とする調査研究に取り組んだ。また小グループを用いての報告会も実施した（第 11・14・15 回）。

本年度から高知のデータを扱ったり、地域で行われているワークショップを教室内で疑似体験できるようにしたりと、いくつかの変更を加えた。高知県を対象とする項目をポイントごとに扱った結果、全体の 1/3 を超える学生が最終課題において高知県内の産業や組織を対象とする調査研究を実施した。前年度まではほとんどゼロだったことを受けると、地域への関心が一定程度高まったこと、一部学生についてはピンポイントではあるがかなり詳細に地域を理解することができたといえる。以下に評価の高かった調査研究のタイトルを 3 点あげておく。

・室戸市吉良川地区における祭りの意義と課題（室戸市）
・課題先進県における中山間地域の現状と未来図（仁淀川町）
・企業と地域が協働した本当の協働とは（大豊町）

本授業は履修者 28 名のうち 25 名が単位修得している。うち秀が 4、優が 12、良が 7、可が 2 であった。

13

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	共通教育	開講学部長等名	大石達良
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	俣野秀典
授業科目名		ファシリテーション演習		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

本授業は、ファシリテーションの考え方やスキルを協同的な学びの場で体感していくものである。傾聴・質問といった基礎的なものから、ワークショップのデザイン、チーム・ファシリテーターとして場を共にしながらチームの状況を診断・介入してくケースまで、体験を通して学んでいき、ここには効果的な会議のデザインも含まれる。

ファシリテーションを扱う特性上、集中講義形式（4 日間）で開講された。さまざまなタイプの話し合い（問題解決やコンセンサスなど）を体験することと、地域で実際に行われているワークショップをいくつか紹介した後、高知で実施するワークショップの設計を行った。そして、それぞれの実施者（運営者）となった時に意識するべきポイントなどを確認した。

成果として、たとえば以下のようなワークショップを学生がデザインした。

- 各集落活動センター2 人程度ずつ、商品開発に興味のある人々を対象とした定員 45 名で行う「高知のうまいもん、集活センターが発信！ワークショップ」
- 地域組織に積極的に関わっていく期待として実施される「長者の未来はあなたたちにかかっている ～消滅か活性か～」
- 母校の後輩達を対象に自分の将来の夢や将来こうなっていたいという将来像を描いてもらう「スタートアップ・フューチャー！」
- 地域の文化を若い世代に継承する「ワールド・カフェ」

また、個人の提案を受けて、一緒にやってみたいメンバーが集い、いくつかのグループがワークショップ実施に向けて動き始めている。

履修者は 30 名で、人文・教育・理・地域協働学部で構成されており、うち 23 名が単位修得している。

14

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	教育学部	開講学部長等名	藤田詠司
	担当教員所属学部等	教育学部	担当教員名	川俣美砂子
授業科目名		乳児保育		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

平成27年度に開設した幼児教育コースでは、保育に関する科目として、1年次第2学期に「乳児保育」を開講した。「乳児保育」では、主に3歳未満児を対象とした心身の発達や保育の計画・内容を学ぶが、同時に、近年、保育士の業務とされた「保護者支援」（改訂『保育所保育指針』平成20年）の観点から、地域や家庭への子育て支援の方法を学ぶ科目でもある。

本授業において学生は初めに、テキストや講義で、乳児の心や体、言葉の一般的な発達の道筋、子育て支援の現状等について基礎的な内容を学んだ。その後、自分達に身近な子育て支援の実態が把握できるよう、大学から一番近い朝倉中央保育園に出向いて、乳幼児や保育士の活動の様子を観察しながら保育に参加し、乳幼児と一緒に遊んだり、おやつを食べる際の補助を行ったりした。学生は事後レポートを作成し、それを発表することで各々の保育参加の状況や気づきを共有した。

別日には、大学の幼児教育実習室にて、朝倉中央保育園岸本章子園長から乳児のおむつ替えや授乳、だっこ・おんぶの仕方等を学び、近年の育児に関する留意事項を聞きながら、実習用の赤ちゃん人形を使用して実践した。加えて後日には、同園長より、「地域子育て支援に配慮した保育士の役割、心構え、やりがいについて」講話をいただいた。これに関しても学生はレポートを作成し、講話いただいた同園長にもお渡しした。

これらによって学生は、乳幼児の成長、発達の道筋や、乳幼児を取り巻く子育て環境の変化、保育ニーズの現状を理解し、人間形成の基盤となる乳幼児期の子どもの生活のあり方や保育所保育の方法について学ぶことができた。特に、現場保育士の子どもとの関わり方を間近で見たり、現役園長の話を伺ったりすることで、地域の子育て支援の現状を実感することができ、本学で実施している地域子育て支援活動「あそぼーや」にもそれが活かされていた。

授業終了後の2月には、朝倉中央保育園の「お楽しみ交流会」に招待いただき、学生は、保育園児のみならず、地域のお年寄り、保育園の子育て支援に参加した乳児と保護者とも触れ合うことができた。今後、地域での活動を広げていく足掛かりにもなったと思う。

幼児教育コースだよりでは、幼児教育コースの学生の学習状況や活動の様子を地域へ発信しており、本年度最終の第3号では、地域子育て支援活動「あそぼーや」の1年を振り返る写真や記事の掲載、「あそぼーや」での保護者アンケートの集計の紹介、来年度の「あそぼーや」の案内も行っている。

報告者は、日本乳幼児教育学会第25回大会（11/26-29昭和女子大学）の参加によって、附属幼稚園の見学、保育内容・保育方法及び地域子育て支援について、先行事例を情報収集することができた。地域の子育て支援センターとしての環境設定や支援内容、学生と、子ども、保護者の活動内容、教員の関わり方等を、授業や「あそぼーや」での活動に活かしていく。

15

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	教育学部	開講学部長等名	藤田詠司
	実施責任者所属学部等	教育学部	実施責任者名	増尾慶裕
授業科目名		技術科指導法Ⅰ		

授　業　実　施　報　告

（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

中学校技術科教育は、日常生活に関連する教科であるため、地域素材との関連性が非常に高い。そこで、本授業科目では高知県内の中学校と連携し日常生活に活用できる指導方法を、大学－中学校－地域の連携により開発した。

新学習指導要領の「技術・家庭科」技術分野の指導目標は、「ものづくりなどの実践的、体験的な学習活動を通して基礎的、基本的な知識及び技術を習得するとともに、技術と社会や環境とのかかわりについて理解を深め、技術を適切に評価し活用する能力と態度を育てる」と示されている。

そしてその学習内容は、「A 材料と加工に関する技術」「B エネルギー変換に関する技術」「C 生物育成に関する技術」「D 情報に関する技術」の4項目である。

本授業における地域志向教育では、高知県の地域素材を活かした中学校技術科の授業を工夫した。例えば、高知県産の特産品であるフルーツトマトを活用した「生物育成」について理解を深め、国会図書館等を利用しこれらの特産品を活かした教育方法を調査するとともに、それらの優れた特徴を活かした地域素材を取り上げ、高知県の素晴らしさや技術の高度性を教材化した。

また、高知県の中学校技術科との連携を図り、大学－中学校－地域との連携により、高知県の地域に根ざした素材を活用した教材や学習指導方法を開発した。高知県産の農作物育成を活用した「生物育成」の学習指導方法を開発したものである。本授業の履修者は１２名であった。

これらの学習指導法等の開発により、学習意欲を高めるための期待理論を用いた学習指導法、スキーマ理論を用いた実用的な既有スキーマを活用した学習指導法、構成主義的な学習指導法に関する教材を開発した。この開発した地域教材を用いて高知県内の中学校で実践を行った。その結果、身近な地域教材を題材にした授業は、学生や生徒に十分な学習効果を得させることができた。

16

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	農学部	開講学部長等名	石川勝美
	担当教員所属学部等	農学部	担当教員名	宮内樹代史、島崎一彦
授業科目名		施設園芸テクノロジー論		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

履修状況
受講者数 26 名
（農学部農学科、暖地農学コース：23 名、自然環境学コース：2 名、生命化学コース：1 名）

取組内容
高知県では、産業振興計画の中で産業のクラスター化を掲げており、農業分野では四万十町に建設中の「次世代施設園芸団地」が核となる。この次世代団地では、オランダ型の環境制御をはじめとした新技術が導入され、集約的な生産システムが実現する。一方、既存の中小規模農家や中山間地域の園芸生産の状況は厳しく、生産性を向上させる方策が望まれている。
本授業では、このような県内施設園芸の動向を学生に周知するとともに、課題解決のための技術や開発の方向性について解説した。また、これらに関連した次世代施設園芸団地の関係者、有識者を招聘し、授業時間内で下記の講演会を開催し、学生の理解を深めた。

1．10 月 21 日
「次世代型こうち新施設園芸システムでの技術開発状況について」
亀島雅史 氏　（高知県 農業技術センター　作物園芸課長）

2．11 月 4 日
「植物工場・食品工場に対応した新たな殺菌システムの開発」
尾辻淳一 氏　（森永乳業 株式会社　装置開発研究所）

3．11 月 11 日
「施設園芸の高度化技術の開発と普及について
－生産性向上・付加価値化に役立つ技術－」
工藤りか 氏　（株式会社 四国総合研究所　電気利用技術部 副主席研究員）

4．11 月 25 日
「世界と日本の温室比較、資材メーカーとしての開発と提案」
直木武之介 氏　（佐藤産業 株式会社　取締役営業本部長）

成果
授業毎のレポート、期末レポートの提出状況から、学生の県内施設園芸の現状認識が高まっていることが分かった。さらに、関係機関（高知県農業技術センター、近畿中国四国農業研究センター等）への実習希望があり、現場で学び、地域農業に貢献したいという意欲の向上が見て取れた。実際に次世代施設園芸高知拠点からの人材要請があり、卒業生が栽培責任者として従事していることから、本授業は地域農業への貢献に直結しているものと考えられる。

17

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	地域協働学部	開講学部長等名	上田健作
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	上田健作　他 17 名
授業科目名		地域協働論		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

【履修状況】「地域協働論」は、地域協働学部生の必須科目である。平成 27 年度は第 1 学期（前期）の月曜日 1 時限目に実施し、地域協働学部 1 年生 67 名が履修した。地域協働学部設置申請書に記載されているように、「地域協働論」は、「産業振興を基盤とする地域再生のキーである『地域協働』の意義と役割に関する研究の到達点と課題について、専任教員が担当する専門選択科目の視点からレクチャーし、学部における専門的学びの全体像を俯瞰する」ものであり、18 名の担当教員によるオムニバス方式で行なった。

【授業での地域に関する取り組み等】
地域協働学部では、高知県における地域課題に対して、実習による現場体験と講義との有機的連関を軸に、地域協働産業人材の育成を図っていく。本授業科目「地域協働論」は、専任教員によるオムニバス形式の授業であり、各教員の専門からみた「地域協働とは何か」また、「地域協働による実践事例」を紹介しながら、「地域協働」という新しい視点を形成するとともに、「地域協働」の全体像を俯瞰する内容になっている。
授業では、高知県内での協働事例はもちろんのこと、日本国内、あるいは海外に及ぶ地域社会を取り上げて、担当教員がこれまでに関わってきた協働に関する多くの活動事例が学生に提供された。
また、月曜日の授業終了後、同週の金曜日を締め切りとして、毎回担当教員から学生に課題が出され、学生はその課題に取り組みながら「地域協働」についての理解を深めていった。

【成果】
平成 27 年度地域志向教育経費を活用し、各教員による「地域協働」の考え方を発信・公開することを目的とし、教科書『地域協働論 Ver.1』を取り纏めた。すでに授業中に教員が論文を配布したり、講義したりした内容を元に印刷物にまとめてきたものを、整理したものであり、学生が体系的に地域協働を理解するためには教科書としてまとめて配布するのが有意義であると考えた。また、教科書（冊子）にすることで学部生のみならず、他大学あるいは高知県の行政・産業界あるいは地域住民にとっても有益な情報を発信できると思われる。『地域協働論 Ver.1』と名付けた理由は、第一に全国初の地域協働を掲げる学部における学問的展開の第一歩であることを示すこと、第二に今後も学部教員が「地域協働」に関する理論と実践を深め、継続的に発信をしていくという志を示していることによる。
高知大学地域協働学部『地域協働論 Ver.1』を添付する。

18

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	地域協働学部	開講学部長等名	上田健作
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	玉里恵美子
授業科目名		地域社会学概論		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

【履修状況】
「地域社会学概論」は第1学期（前期）の金曜日第1時限目に実施した。受講生は、「地域社会学概論」（地域協働学部専門科目）として67名、「地域社会学概論」（教育学部専門科目）として40名、「社会学各論」（教育学部専門科目）として6名の、合計113名が受講した。

【授業での地域に関する取り組み】
「地域社会学概論」の教育内容は、　地域社会の構造と機能について、農村社会学と都市社会学の基礎的な知見について解説し、理解を深めることである。本授業では、特に日本の農村社会学の基本的な理論であるイエ・ムラ理論について解説し、それによって日本の農村社会の構造について理解を深め、過疎化や高齢化によって農村がどのように変容し、またどのような課題を抱えているのかを具体的事例に沿いながら理解していった。また、高知県の事例においては、「集落活動センター」と「あったかふれあいセンター」の２つの「小さな拠点」についてとりあげた。さらには、過疎地域における生活問題や地域再生の課題についても解説し、地方創生の先進地域(例えば、島根県隠岐郡海士町)の紹介を含めながら、地域協働活動を行っていくための基礎知識を習得させた。
また、毎回ワークシートを課し、KULAS を通じて配布することで授業時間外学習を促し、小テストを実施することによって知識の定着を図った。

【成果】
授業改善15週目アンケートの結果も概ね良好であり、自由回答には「先生の熱意ある授業が良かったと思う」、「小テストをしていただけるのはありがたい」、「この授業での学習内容が他の授業でも役立つことが多かったように感じました」とあり、当初の目的をおおむね達成することができた。
担当者は、2009年に『集落限界化を超えて』（単著）、2013年に『限界集落の生活と地域づくり』(共著)を出版しており、「地域社会学概論」で教科書として用いてきたが、平成27年度地域志向教育経費によって地方創生の先進地域である島根県隠岐郡海士町のデータ収集を行うことができたので、最新の情報を含めた新単著を執筆し、平成28年度中には発行する予定である。

19

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	地域協働学部	開講学部長等名	上田健作
	担当教員所属学部等	地域協働学部	担当教員名	内田純一
授業科目名		地域組織論		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

地域協働学部１年生の必修授業として６６名が履修した。

地域に関する取り組みについては、具体的に以下の高知県内実践を取り上げ、地域という場において人々が織りなす社会的な関係（地域生活における組織の必要性）の意義及び地域における諸組織の主体的力量形成と相互発達のあり方について理解をふかめた。

① 四万十町立米奥小学校学校運営協議会を中心とする地域植林プロジェクト
② 大月町柏島 NPO 法人黒潮実感センターにおける里海づくりの実践
③ 南国市稲生集落活動センターにおける地域の組織づくり
④ 中芸地域における社会教育福祉を基盤とした地域づくり

このうち①②③においては、担当教員によるこれまでの研究蓄積と成果をもとに授業を展開した。④については、担当教員が「NPO 法人 Homo Ludens 田野町ぷらうらんど」事業へ参加し、ぷらうらんど職員より専門的助言（聞き取り調査）を得ることで、それをもとに地域を組織していく専門的力量について授業で講義をした。

以上を踏まえグループごとに、地域を組織する学習支援モデル（健康づくりを例に）を構築した最終報告会を行った。報告会では、各グループがそれぞれに考えた学習支援モデルを紹介するとともに、地域住民が自己健康力を高めることをめざした学習の組織化と、その学習を支援する地域における専門的諸組織の意義、地域住民と専門的諸組織との相互発達関係のあり方について活発な論議がなされた。

20

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	土佐さきがけプログラム	開講学部長等名	岩崎貢三
	担当教員所属学部等	土佐さきがけプログラム 国際人材育成コース	担当教員名	前西繁成
授業科目名		Japanese Studies Taught in English Ⅱ： Japanese Culture		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

履修者　22 名
　内訳　土佐さきがけプログラム　国際人材育成コース　5名
　　アメリカ・ロードアイランド大学　短期留学生　11 名
　　マレーシア・プトラ大学　短期留学生　6名

取組内容
１　明治以降の日本の歴史に関する講義（自由民権思想を含む）を通じて、日本の歴史とその特徴を英語で理解し、説明する。
２　日本の文化の特徴について調べて英語で発表する。（伝統芸能、アニメーションなど）
３　フィールド学習として高知県内の施設を見学し、高知県が日本文化に貢献している役割について理解を深める。

・テーマ　日本の自由民権思想の発祥について
　　日本のマンガやアニメ等のソフト・パワーについて

・訪問先　高知市立自由民権記念館
　　香美市立やなせたかし記念館
　　高知市文化プラザかるぽーと　横山隆一記念まんが館
　　高知市文化プラザかるぽーと　学習室（講義を実施）

成果
１　日本文化を学ぶというテーマで、高知県の歴史や県内にある施設を取り上げたことで、地域に対する誇りを持ち、関連する知識を深めることができた。

２　学生は講義に加え、自ら調査した内容に関するプレゼンテーションを行った。その後、関連する施設を見学することにより、より深く学習することができた。

３　海外からの留学生が参加したことにより、外国人に理解させる難しさに取り組み、結果として英語で説明する能力を向上させることができた。

21

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	土佐さきがけプログラム	開講学部長等名	岩崎貢三
	担当教員所属学部等	土佐さきがけプログラム 生命・環境人材育成ｺｰｽ	担当教員名	永田信治　他
授業科目名		産官学連携インターンシップ		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

■土佐さきがけプログラム、生命・環境人材育成コース３年生、全３名を受講生として、産官学連携のインターンシップ実習と事前事後指導を行った。本年度から始まった本講義では、高知県の農業生産環境の保全と向上、地域特産物の高度利用や高付加価値化に関する研究を推進し、その基礎知識や実験技術を習得させ、県内の公的試験機関や企業で、研究・調査・分析・課題設定・課題探求等の協働的作業を体験する。高知県などの地域社会と国民生活に役立つ研究立案能力・実習能力・協働能力を養い、実社会で役立つ最先端技術の習得と充実すべき器材や環境を構築できる知識を習得した。

■すでに配属した研究室で実施した実験訓練と課題研究活動、6～12 月期に開講した関連分野の学生実験における学生指導等を事前活動として、8～9 月に１週間以上の学外活動を行い、10 月には企業研究者を招聘し、本講義の報告会と社会に求められる人材研修を行った。実習先は、高知県工業技術センター（清酒醸造分野）、アミール動物病院（動物臨床分野）、株式会社日本トリム（食品分析分野）であった。

■本講義の単位認定の最終課題として、実習内容に関する報告を行う産官学連携インターンシップ報告会を、平成 27 年 10 月 29 日（木）に高知大学農学部 3-1-13 教室（物部キャンパス）にて開催し、①「清酒酵母と清酒醸造～高知県工業技術センター」、②「電解水と植物栽培～株式会社日本トリム」、③「動物の健康管理～アミール動物病院」の３件の報告と質疑応答を行うと共に、同日、人材育成セミナーとして（株）ダイセルの山本浩明博士による「農芸化学分野の企業研究者の 30 年～社会に貢献する人材」の講演と議論を含む事後指導を行った。

■本講義は、将来の学習目標や研究課題を掘り起こす機会であり、学生の未来設計、人生構想の手掛かりを見出せる科目である。高知県の地場産業に貢献する公的試験機関や企業と当該研究室の協働活動によって、今後の高知県の課題や障害を解決する取組みを行うと共に、高知県の就業環境を知って高知県での修業を就業に結びつけ、高知県に定住して世界を目指す実践能力の養成をめざした。本講義の各実習に関する共通の到達目標は、先端研究の内容を理解し、その研究に利用する機器の原理や操作方法、目的の分析のためのデータ解析技術を修得することにあり、４年次の卒業論文作成の対象となる課題探索と研究活動をスタートする上で、それぞれの分野に効果的な学習を行う機会となった。

■履修目標である、①地域に貢献できる生命・環境関連の諸分野における基礎的な知識を得る、②地域に貢献できる生命・環境関連の諸分野に対する学習意欲・興味が向上する、③地域に貢献できる生命・環境の諸分野の研究を進めていく上でのヒントを得る、④地域に貢献できる生命・環境の諸分野と高知県の課題との結びつきがわかる、⑤地域に貢献できる生命・環境の問題と高知県の新しい課題を探求する、の５点について実効性の高い学外実習として成果をあげた。

21

新設　・　転換

申請者等	開講部局名	土佐さきがけプログラム	開講学部長等名	岩崎貢三
	担当教員所属学部等	土佐さきがけプログラム 生命・環境人材育成ｺｰｽ	担当教員名	永田信治　他
授業科目名		生命と環境Ⅰ		

授　業　実　施　報　告
（履修状況、授業での地域に関する取組具体内容、成果等）

■土佐さきがけプログラム、生命・環境人材育成コース１年生、全６名を受講生として、入学当初に全教員との面談と研究室訪問を行うと共に、６～７月期に各研究分野の課題探求とレポートを課した実習体験を行った。

■本講義は、平成 27 年度 4～7 月にかけて集中開講として行った。土佐さきがけプログラム生命・環境人材育成コースの全教員（17 名）が担当し、生命と環境をキーワードとして高知県における農業生産環境の保全と向上と、地域特産物の高度利用や高付加価値化に関する研究を推進するための基礎的な学習と基本的な実習を行った。また、今後の学習目標や研究課題を探求し、自らが探求すべき研究課題、学習したい事象を掘り起こす機会にすると共に、未来の進路設計・人生構想を自力で考える智恵を身につけることを目標とした専門科目である。

■主な授業内容は以下の通り。
【第１回】オリエンテーションと履修指導：評価のスケジュール、コース概要と研究分野を理解する【第２～４回】教員面談と研究室訪問：各研究分野の研究目的と地域産業との関わりを核とする地域貢献策を理解する【第５～７回】応用生物科学実習その１：生命活動と環境を学ぶ上での興味と問題意識や社会情勢を知る努力と視野の維持、特に生物資源利用化学分野と応用微生物学分野について【第８～10 回】応用生物科学実習その２：生命活動と環境を学ぶ上での興味と問題意識や社会情勢を知る努力と視野の維持、特に土壌化学分野と植物栄養学分野について 【第 11～13 回】応用生物科学実習その３：生命活動と環境を学ぶ上での興味と問題意識や社会情勢を知る努力と視野の維持、特に応用生化学分野と環境微生物学分野について 【第 14～16 回】応用生物科学実習その４：生命活動と環境を学ぶ上での興味と問題意識や社会情勢を知る努力と視野の維持、特に化学生態学分野と動物生殖工学分野について

■本講義の主題は、生命科学の諸現象の解明と環境保全を念頭に置いた循環型の生物資源の生産と利用の全体像を理解し、高知県における生物資源の利用と保全の現状と目的に関心を深め、地域振興に寄与できる研究や調査を達成するための知識・理解、思考・判断、関心・意欲・態度、技能・表現を涵養することにあり、その到達目標は、①生命・環境人材育成コースでの学習と研究分野、研究内容を知って、将来の進路のための学習計画を立てられること、②生命・環境人材育成コースが扱うフィールドと基礎的な実習内容を理解して、今後必要な知識を得る学習計画を立てられること、③生命・環境人材育成コースの教員、学生とのコニュニケーションを通じて、協働的活動と自立的学習を両立させることであるが、初年次受講科目として、入学当初から大学の研究室を知り、全教員だけでなく上級生との対話と実習指導を受けることによって、コースで行う教育と研究の目標を知り、地域や社会と関わりのある問題点や課題を掘り起こす意義・意図を理解した上で、今後の学習に意欲的に取り組む機会として貴重な機会となった。特に、専門科目が少なく目標を見失い易い１年次１学期に、学生の学習意欲を維持するために重要な講義と言える。